

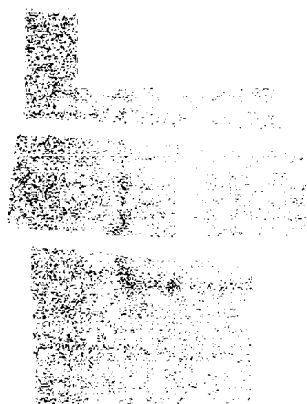
己丑刻

九月

鶴見和子 牧瀬菊枝 編

ひき裂かれて

— 母の戦争体験 —



筑摩書房

ひき裂かれて

○

昭和三十四年六月二十五日発行

定価 二二〇円

編者 鶴見和子

牧瀬菊枝

発行者 古田 晁

印刷者 小田 茂作

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話二九局 七六五一、五
振替東京 一六五七六八

印刷 東光印刷・製本 藤田製本

© 1959 K. Tsurumi, K. Makise

はじめに

「生活をつづる会」ひなたグループの主婦たちが、一九五六年から、二年がかりで書きあげたのが、ガリ版文集「母の戦争体験」であった。はじめは、子どもを戦争から守ることのできなかった母親のつらい思いを、子どもたちに伝えたい一心で書いた。しかし、書いているうちに、わたしたちは、わたしたちだけでなく、男の人たちもふくめて、もっとさまざまな年齢、職業の人たちの戦争体験をしたい、そしてみんなであわせてみたい、という気持ちになった。

わたしたちのたどった新しい文集に対してよせられた、多くのはげましや批判に勇気づけられて、わたしたち主婦は、母親大会や国民文化集会などの席上、「みんな戦争体験を書きましよう」とよびかけた。一九五八年八月一日の終戦記念日に、わたしたち主婦のひとり、「戦争体験を書いて」という文章を、朝日新聞「ひととき」に投稿したのがきっかけとなり、筑摩書房編集部の方が、出版のことを熱心にすすめて下さった。

そこで、ひなたグループに、若妻グループ、つくしグループ、平井グループ、みのり会、あゆむ会、職場グループ、長崎生活をつづる会など、生活をつづる会の各グループも参加して、この一年間みんなで批判と話し合いを重ねながら、戦争体験をあたらしく書いたり、書き直したりして、やっとこの一冊の本がまとまった。枚数の都合で、この本にのせられなかった作品も二十篇近くある。また、個別的・主観的な生活記録を、くらべ合わせ、組み合わせることによって、いく分か集団的・客観的な庶民

の歴史に近づけるころみとして、年表による戦争体験年代史を加えた。

戦争によって、わたしたちは、愛するものたちからひき裂かれただけでなく、わたしたちの肉体と精神にさまざまなきずを負った。ひき裂かれたきずあとを、みきわめるという意味で、わたしたちはこの本を、「ひき裂かれて」と題した。

この本ができ上がったのは、昨年八月から今日まで、グループの話しあいに参加し、わたしたちをたえずはげましつづけて下さった、筑摩書房の原田さんのおかげであることを、心からお礼申し上げる。

一九五九年四月

生活をつづる会

ひき裂かれて

目次

戦争中のくらし

八月十五日まで……………高橋やえ子…2

じゃがいもと指輪……………大野 幸子…33

将校の妻……………泉 七重…45

無知の責任……………津村 しの…52

職場の中で

教師の生活……………宇田久美子…70

天皇の官吏……………加生富美子…85

ゆがめられた青春

学徒動員……………出嶋素子…96

学徒出陣……………田村ゆき子…109

戦火に追われて

三月十日……………増田信子…120

罹災の夜……………北条志津…125

生と死のあいだ……………本多道子……………134

家族と別れて

学童疎開……………黒須つる子……………146

みちはる……………望月寿美子……………161

弟の戦死……………木村たみ……………167

面会……………岡田早苗……………181

戦争の体験から

ひなたグループの歩み……………牧瀬 菊枝… 208

戦争体験年代史へのこころみ……………鶴見 和子… 229

戦争中のくらし



八月十五日まで

高橋やえ子

その一 なべ

すがすがしい初夏の朝だった。もやが晴れて山の縁がくつきりと浮び、空は遠くまで澄んでいた。子どもたちも上きげんで、食事が終ると、さっさと庭にとび出しドロッコをはじめたり、ママゴトのどちそうを捜しにいたり、男の子はなんとなく、そこいらへんの木によじのぼってみたりしている。いったいどこで戦争をしているのかと思われるような、のどかな気分がただよっていた。

わたしも胸いっぱい新しい朝の空気を吸いこみながら、荷綱を張って洗濯物を干しにかかった。と、そのとき、

「このあいだ当ったナベ、わたしにukれない？」

うしろから突然、かん高い声がきこえてきた。

「え？」

わたしはおどろいてふりむいた。富子がふとんを小脇にかかえ、下駄をつっかけながら言っている。ああ、あのナベのことだな、とうとう来たのか、そう思うとわたしは急に緊張した。けれどなんの前置きもなく、いきなり今すぐに返事を要求してきたのには、すっかりドギマギしてしまった。

「どうして？」

「どうしてって、あんたにはああいうナベが一つあるじゃないの、それに人数は二人だし、わたしのほうは四人でしょう。今あるナベだって、だんだん穴はあくし、買おうたって売っちゃいないし」

そのころ（昭和二十年五月）は、もはや金物類いっさい店先から姿を消していた。

「そりゃあそうだけど、わたしのほうにだって余分にあるわけじゃないわ。ナベらしいもの、たった二つよ。それに、せっかく当たったんですもの……」

「へえー。じゃ、くれないってわけね。あきれた。これまでさ、わたしのほうから、ずいぶん助けてあげたじゃないの。こうやってお米を食べていられるのは、わたしが肥料と交換したからよ。それなのに、高橋さん（わたしの夫）なんか、男のくせになに一つ獲得できないじゃないの。本ばかり読んでいたって、いざとなると役に立たないわねえ。これまでのこと考えたって、ナベくらいよこすの、あたりまえよ」

そういう富子の顔は見るまにけわしくなり、ろこつなことばはびしびしわたしの胸にひびいてくる。「まあ。じゃ、あなたはこれまでのことを、そういうふうに思ってたのね」

おろおろしてしまつたわたしは、それだけしか言えない。すると、それをあざ笑うように、富子は太い声で自信たっぷりと言いつつ放った。

「そうよ。実力のないものは、こういう世の中ではダメなのよ」

実力！ 実力とはよくも言った。聞、顔、金の実力だろうか、そうなのだ。富子の言う意味はそれよりほかにない。わたしはいま、落ち着いてきつぱりと、夫のためにも言っておかなければとあせりながら、洗濯物をひろげる手はふるえ、動悸はひどくなるばかりである。が、懸命に言いつづけた。

「高橋は、そういう点ではダメなのよ。お米の買える知合いがあるわけではないし、買出しに行く時間もないのよ。だからといって、なんの役にも立たないように言うのはひどいわ。わたしは最初に言ったじゃないの。わたしにはなに一つ物々交換の種になるものはないけれど、幸いからだだけは丈夫で、子どもも一人だから、からだで奉仕するって。あなたもそれでいいって言ったわね。だからそのつもりで、誠心誠意、勤労奉仕だって、開墾だって、やってきたじゃないの。そのことを考えてくれなきゃ、あんまりだわ」

さきほどから何事が起ったかと、ママゴトをやめて四人の子どもたちはびっくりして見ている。すると富子はますます声高に、

「知合いがないとかなんとか言うけど、やっぱり心がけの問題よ。努力すれば、何だって手に入るのよ」

ふんと言ふような調子で冷笑を浮べ、ユウユウとふとんをひろげている富子を見ていたわたしは、とうとうこらえきれなくなってしまった。

「そんなことを……あんまりだわ、あんまりひどいわ」

ぐっと胸がつまり涙があふれ出た。もうこれ以上言うまい、こんな相手に言っても何になる、と思いながらも、存分に言いつくせなかった口惜しさに、唇がぶるぶる震えるのを、どうしようもなかった。ちょうどそのとき、ガサガサと草むらを分けて歩く音がして、天びんに水桶をさげた山の上のお

かみさんが現われたので、この言争いもここで打切るよりほかはなく、後味の悪い思いでお互いに黙ってしまった。

わたしたちがここに共同生活をはじめたのは三カ月ほど前のこと。そのきっかけになったのは、わたしと明子が疎開先で追いたてを食ったことからである。わたしの家は東京中野のはずれにあり、近くにめぼしい軍事施設もないし、そして疎開する縁故もないので、二歳の明子がありながら、日ましにはげしくなる爆撃におびえても、東京にじっとしていた。けれども昭和十九年十二月にはいると、爆撃は夜となく昼となく、息つくひまもないようになり、空襲のサイレンにおびえてけたたましく泣き叫ぶ明子を見ていると、「こんな周辺地区にまで爆弾が落ちる前に、日本は敗北するよ」と見通しを立てていた夫もついに疎開を決意した。とはいえ行くあてもないので、引っこみ思案のわたしも、この時ばかりはおどろくほどのあつかましさと、知人のまた知人をたよって東京を去ることにした。

むろん夫は勤めの関係（出版社で編集の仕事をしていた）で東京に残らねばならなかった。わたしと明子は山梨県のある村におしかけていったわけだけれども、ころがりこまれたほうにも、わたしたち親子を収容する部屋があるわけではなく、思いあまって強引に、隣のアんまさんの借りている二間の一つに落ち着かせてもらった。これも三カ月という約束であった。

東京の大空襲をきくたびに、まっさきに案じられるのは夫の安否、そして手紙を見るまでは落ち着かなかった。その間でも日々の生活は決してのんきではなく、見知らぬ土地では米はおろか、野菜一つたやすくは売ってもらえず、心細さとひもじさに、わたしは、いつまで耐えられるだろうかと不安になり、いやいや、弱気を出してはならぬ、東京の空の下に住む人たちは、夫をはじめ、もっともつと恐ろしい思いをしているのだ、と自分をはげましてみたりして暮していた。

「せっかく生れてきた子どもを、むざむざとこの馬鹿な戦争のために殺したくはない。疎開すれば大丈夫と思うが、明子のこととはたのむよ」

と夫と出発の前夜、珍しくこまごまと将来のことまで話し合ったことなど思い、わたしは、なんとしてもこの子を守り育てねばと新たに勇気をふるい起すのだった。大根一本でもほしいと思つて何かと農家の手つだいを申し出たが、農閑期に入つてしまつた折なので、子連れではほとんど仕事もなく、いも類のほしいときは、なけなしの乏しい荷物の中から、メリヤスのシャツなどを引つ張り出しては交換してもらつていた。山の遠いところなので、薪は前の河原に打上げられる流木をひろい、どうにか親子二人の煮炊きをしていた。

こうしたその日ぐらしもいつの間にか二カ月ほどたち、とうとうある日、家主がやってきて、近々に家をあけてくれと言ひ渡されてしまつた。こうなればしかたがない、この二カ月の間に、わずかも顔見知りになつた人のところをたずねて、親子二人置いてもらえよう、頼みこんで歩かねばならないと決心して、心あたりのあちこちをたずねまわつていた。折も折、ひょっこり珍しい人からハガキが舞いこんだ。松山富子からである。

「当地に来ています。ぜひ一度いらしてください。お話ししたいことがいっぱいです」

と書いて道順が記されてある。住所を見ると、この村の駅から二駅ほど乗れば行ける所だ。富子はわたしの親戚、松山徹の妻で、かれは半年ほど前に南の海戦で船と運命を共にしてしまつた。残された三人の学齡前の子どもたちと、二十七の若い妻富子に対してわたしは心から氣の毒に思い、何か彼女の役に立つことがあるならばと考えていたくらいなので、葉書を受けとると、胸をわくわくさせながら明子を連れて出かけていった。

そこは山を背にした段々畑の小さな村であるが、部落全体が畑のある崖のような形で、はるか底の方を流れる富士川を見下して風景はなかなか美しい。異郷でめぐり合ったというのも大げさだが、ともかくも戦争というものによって、しゃにむにここまで追いやられ、お互いに心細い思いをしている時なので、手を取り合えばかりに喜び合った。明子も富子の子どもたちとすぐ馴れて、きゃあきゃあ走り廻っている。話のあとさきも考えずただ夢中にしゃべり合った末に、富子是一个の案を出した。「わたしね、考えるんだけどさ、とにかく三人も子ども連れてるでしよう。勤労奉仕だって出られやしないわよ。一回や二回出ないのはいいとしても、そのうちにきつとなんとか言われるわよ。まだここへきて一月にもならないけれど、田舎もうるさいわねえ」

「そうね。このごろは東京もひどいけど、田舎はなお口うるさいでしょう。だけどあなたに勤労奉仕に出ろって言うほうが無理よ」

「だからさ、こうしたらどうかしら。あなたも家を捜してるんなら、いっそのことここへ来ない？　そうすりゃ、代りばんこに奉仕にも出られるし、二人でなら子どもの面倒だって見られるわよ」

「そうねえ……だけど食糧がねえ、大丈夫かしら」

富子の案には一応うなずきながらも、わたしには大きな不安があった。それは食糧である。富子の家族が四人、わたしたちが二人、計六人が、今後この村ではたして食べていけるだろうか。見ればせまい段々畑ばかりで、田んぼなどちっともないようだから。

「案外ね、こう見えても、下の川の近くに田んぼがあるらしいの。わたしたちの食べるくらいは大丈夫よ。それに実家から貨車でこの荷物が来るとき、おじいちゃん（彼女の父）が豆粕もいっしょに送ってくれたの。これと交換していれば、お米でもなんでも手に入るわ」